COLUMN

● シリーズ　私の見た日本　Vol.231

私が読み取る東京の街

中国上海市生まれ。2020年上海工芸美術職業技術学院卒業、2022～2024年東京造形大学室内建築専攻領域卒業。現在、東京造形大学大学院デザイン研究領域上田研究室に在籍

王 浩百（オウ コウヒャク）

私は中国上海出身の留学生であり、現在、東京造形大学大学院上田研究室に在籍している。日本との最初の出会いは2017年だ。その頃の私は単なる外国人観光客であった。日本の都市景観は私にとって新鮮で独特であり、まるで細部まで描き込まれた絵巻が目の前でゆっくりと広がっていくようであった。観光客と同じように、私は数多くの寺院や神社、にぎやかな商店街を巡り、異国文化の雰囲気に浸った。当時の私は観光客の眼差しでこの土地を見つめていたが、日本のデザインや美学、そして街並みに強く惹かれた。その憧れが、私に日本への留学を決意させた。数年にわたる準備を経て、2021年に日本へ渡り、翌年、編入生として東京造形大学の室内建築専攻領域に入学した。

中国と日本の土地制度の違い

日本とは異なり、中国の都市における土地はすべて国有地であり、政府がディベロッパーに土地使用権を譲渡する形で供給されている。一般人は、基本的にディベロッパーから住宅、いわゆる上物を購入するしかない。このような制度のもと、住宅は標準化された商品となっている。同時に、中国の都市計画は、広々とした道路、整然とした街区、画一的に設計された建物群を特徴とする、政府主導の総合的なプランが核となっている。このような社会的・経済的環境が相まって、現在の中国では20階建てや30階建ての高密度住宅街が至る所に広がっている。

一方、日本では土地を私有財産として売買できるため、個人が土地を取得し、自らの思いに沿った住宅を建てることが比較的容易である。この自由さが、日本の都市景観に多様性をもたらしている。異なる時代や種類の住宅が混在し、とりわけ低層の高密度住宅地が多く見られる。しかし、中国と同様に、日本においても近代化の過程で人々と土地の関係は次第に希薄になり、地域性や場所性は徐々に曖昧になりつつある。東京の街を歩くと、ハウスメーカーによる均質化された住宅が至る所に見受けられる。サイディングの外壁、アルミ製の建具、安価な屋根材が都市の日常風景を形成し、抽象化された「日本的要素」が記号化され、繰り返し視界に現れる。

東京の風景に刻まれた歴史

私は日本に来てからずっと東京に住んでいる。授業の合間には、よくカメラを持って街のあちこちを歩きながら観察しており、人々が気づかないような都市の風景を記録している。都市を読むことは、まるでレコードを選ぶようなものである。最初はレコードのジャケットに引き寄せられ、次にメロディーやリズムに浸り、最後に制作背景を深く掘り下げて、裏の感情や時代の印を理解しようと試みる。東京の都市風景も同様である。

東京は「歴史的建物」が不足しているわけではない。伝統的な日本建築から、明治維新後の和洋折衷建築、戦後のモダニズムやポストモダン建築まで、それらはまるでレコードのジャケットのように、異なる時代の記憶を担っている。しかし、実際に東京で生活を始めてから私の目を引くのは、これらの象徴的な歴史遺産ではなく、街の息吹を感じさせる無数の一般的な住宅――日々の景観の中でひっそりと佇む建物に、いつしか目が留まるようになった。現在の東京では、過去の風景を見つけるのは簡単ではない。歴史の痕跡は、近代化の波によって何重にも覆われ、昔の街路や町屋は次々と新しい建物に取って代わられている。東京には今も物語が溢れているが、その過去は、何度も繰り返し録音されたカセットテープのように、音色が次第にぼやけ、かつてのメロディーは識別しづらくなっている。

考古学者は同じ場所での土層、遺物、建築遺跡などを分析することによって、異なる歴史的時期の建築の変遷を推測する。この方法は層序学と呼ばれ、私は東京の地層を掘り進め、歴史を直接触れることはできない。けれども、異なる街区を歩くなかで、歴史の痕跡を感じ取ることができ、東京のイメージも私の観察の中で次第に明確になってきた。明治以降、東京は幾度となく姿を変えてきたが、その歴史的な脈絡は次第に曖昧になっている。今の都市景観は、社会的な変化が重なり合った結果として成り立っている。高層ビルが立ち並ぶ虎ノ門、記念碑的な丸の内、混沌とした新宿の街角など、これらは今日の東京を象徴している。江戸時代の遺跡は今や化石のように江戸東京建物園に展示され、かつて明確に分かれていた「下町」と「山手」の概念も、現代都市の発展の中で曖昧になりつつある。月島や南千住一帯を訪れる機会があったが、木密と呼ばれる低層の木造住宅が密集している地域は、戦後復興期の光景をそのままにしているかのように見えた。特に南千住に近くの山谷地区では、ドヤ街の名残を残す木造の廉価住宅が多く見られる。山谷近くでは、都市再開発が進み、高層マンションが次々と建設され、開発事業が広がりつつある一方で、ローカルな街並みと共存している。歴史と現実、過去と未来がこの土地で交錯し、強烈な視覚的・空間的対比を生んでいる。まさにこの視覚的インパクトによって、私はより立体的な東京の姿を感じるようになった。

ジェネリックシティの中の異質なオブジェクト

日本では、住宅街の都市景観は絶えず更新されながら無意識のうちに形成されていく。東京の街を歩いていると、しばしば奇妙な個人住宅に出会うことがある。それらはまるで彫刻家が丹念に磨き上げた作品のように、均質な都市空間の中で純粋なオブジェクトとして際立ち、異質な存在感を放っている。この視覚的な違和感は、中国の都市景観ではこれまで味わったことがなかったものであった。

東京の住宅は、まるで新陳代謝するように、数十年ごとに姿を変えていく。バブル経済崩壊後、地価の下落とともに、多くの建築家が都心の土地で住宅設計を試みる機会を得た。

一年前、私は偶然、フランス人写真家ジェレミー・ストゥテラの写真集『東京の家』を手に取った。そこには日本の建築家が手がけたユニークな住宅が数多く記録されており、それぞれが実験的なアート作品のような佇まいを見せていた。私は以前から都市の中に潜む魅力的な建物を撮影することに熱中していたため、彼の作品に強く共鳴した。しかし、法律上の規制により、個人住宅の正確な所在地は公開されていない。そこで、私はストゥテラのブログを追いかけ、彼が示す曖昧な手がかりを頼りに都心を訪ね歩きながら、これらの建築を探した。見つけるたびに、当時の雑誌に掲載された竣工写真と見比べながら、時の流れが建物に刻んだ変化を味わった。

2024年の年末、私は完成間近の「蟻鱒鳶ル」を訪れた。この建築は、まるで解体途中のような異様な姿をした建築であり、建築家岡啓輔が20年もの歳月をかけて自らの手で築き上げたものである。皮肉なことに、かつてこの建物を取り囲んでいた普通のマンションは次々と解体され、いまや周囲に残された唯一の建物となっていた。本来ならば都市の中で異質なオブジェクトであったはずのそれが、むしろ周囲に溶け込むようになっていた。

東京と上海の交差点

東京の街を歩いていると、狭い路地や密集した低層住宅、そして改修や建て替えによって微妙に変化する建築の表情が、私の故郷である上海を思い起こさせる。

上海の里弄住宅もまた、高密度で低層の街区を形成し、建物同士の距離が極めて近く、隣人との関係も親密である。路地の中で繰り広げられる日常の営みは、豊かな空間を生み出している。東京の住宅地と同様に、里弄住宅もまた長い歴史を内包しながら、時代の変遷の中で改築、解体、再建を繰り返してきた。

日本に留学した数年間、私は東京と上海を頻繁に往復する機会を得た。それによって、自らの故郷を独自の視点から見つめ直すことができた。現在の上海は大規模な都市再開発計画が進められており、かつて東京の下町のように人間味あふれる街並みは、次第に高層ビルに取って代わられつつある。

私は東京の街を「読む」ことでこの都市を理解しようとしてきた。同じように、カメラを通じて今日の上海を記録し、それを「読む」ことを試みている。留学生活は、東京を多角的に知る機会を与えたが、同時に、故郷上海に対する記憶にも距離が生まれ、微妙によそよそしいものへと変わっていった。

建設中のビルディング

東京の街

異なる世代の住宅が並ぶ

木密地域

アトリエ系事務所オクトーバーの作品

蟻鱒鳶ル

解体中の家

上海の旧市街地

再開発が進む上海

再開発が進む上海